

2018/02/04

「苦しみの先に」

戦争や災害などのつらいニュースを聞くたびに、なぜ神がいるならこのようなことが起こるのか、なぜ神は苦しみに会わないように助けてくれないのかという声が上がります。これに対して、神様はどのように教えておられるのでしょうか。

■苦しみの先に神の慰めといやしがある

「神は、どのような苦しみのときにも、私達を慰めてくださいます。こうして、私達も、自分自身が神から受ける慰めによって、どのような苦しみの中にいる人をも慰めることができるのです。それは、私達にキリストの苦難があふれているように、慰めもまたキリストによってあふれているからです。もし私達が苦しみに会うなら、それはあなたがたの慰めと救いのためです。」（Ⅱコリント 1:4-6）

「救い」は「癒し」とも訳されます。つまり、苦しみに会うのは、慰めを受け、癒されるためだと教えられているのです。神様は、苦しみを防ぐこともできるのですが、慰めと癒しを与えるために、あえて私達と一緒に苦しみを受けておられるのです。

神様は、なんでもできる方であると同時に、私達を導き、癒す神です。そして、私達が癒しを受け取るためには、苦しみを通過する必要があるのです。それを教えているのが、イエス・キリストの十字架です。

イエス・キリストは、人の姿を持ってこの地上に来られ、人間が受けるあらゆる苦しみをお受けになりました。イエス様は、人々からさげすまれ、嫌われ、迫害され、十字架に架かり、死までもお受けになりましたが、それは、私達が受ける苦しみを、すべて共に受けるということを示しておられるのです。なぜなら、その苦しみの先には慰めがあるからです。イエス様は、そのことを、ご自分が復活することを通して示されました。

イエス様は、苦しみの先にある神の慰めという素晴らしい恵みを手にしてほしいと願って、あえてその苦しみを静観なさいます。しかし、ただ静観するだけでなく、私もあなた方と一緒に苦しみを受けておられるのです。

ともすると、私達は、目先の苦しみから解放されることが神の祝福だと思ってしまいます。しかし、本当の祝福は、私達の内側が癒されることであり、真の慰めを手にするのです。

冷たいと感じない人は、熱いと感じることができません。苦しみを知らなければ、神の慰めと愛を知ることはできないのです。言葉の上で、神は慰め主であり愛の方であることを知っているのと、自身の体験によって知るとではまったく違います。まことに神の慰めを知るためには、苦しみを知る者になる必要があるのです。そのために、イエス様は十字架に架かり、あなたと一緒に苦しむと言っておられるのです。

■神の慰めとは

1. 自分の弱さを受け入れられるようになる

苦しみに会う前、私達は、自分の弱さや不完全さを隠し、自分の立派さを誇って生きていました。ありのままの自分を受け入れることができず、正しいことを実行できない自分や、悪い自分、弱い自分を拒否し、何を持っているか、何ができるか、自分の肩書きを誇って、自分を立派に見せようとして生きてきたのです。しかし、本当は自分が弱いことを知っていますから、このようにすることが、むしろ自分を不安にさせ、苦しめる結果となりました。

ところが、苦しみに会うことで、私達は自分を正直に見つめることができるようになり、ありのままの自分を受け入れられるようになっていきます。これが、イエス・キリストが与えてくださる救い（癒し）と慰めです。パウロは自分が苦しみに会った様子を次のように証しています。

「彼らはキリストのしもべですか。私は狂気したように言いますが、私は彼ら以上にそうなのです。私の労苦は彼らよりも多く、牢に入れられたことも多く、また、むち打たれたことは数えきれず、死に直面したこともしばしばでした。ユダヤ人から三十九のむちを受けたことが五度、むちで打たれたことが三度、石で打たれたことが一度、難船したことが三度あり、一昼夜、海上を漂ったこともあります。幾度も旅をし、川の難、盗賊の難、同国民から受ける難、異邦人から受ける難、都市の難、荒野の難、海上の難、にせ兄弟の難に会い、労し苦しみ、たびたび眠られぬ夜を過ごし、飢え渴き、しばしば食べ物もなく、寒さに凍え、裸でいたこともありました。このような外から来ることのほかに、日々私に押しかかるすべての教会への心づかいがあります。だれかが弱くて、私が弱くない、ということがあるでしょうか。だれかがつまずいていて、私の心が激しく痛まないでおられましょうか。」（Ⅱコリント 11:23-29）

パウロは、私達の想像を超えた苦しみを経験していることがわかります。一生懸命福音を伝えているパウロを、なぜ神は助けなかったのでしょうか。それは、このことを通して自分の弱さを受け入れるためだったと、パウロは悟りました。この時、神はパウロを助けるのではなく、パウロと一緒に苦しみを受けておられたのです。

「もしどうしても誇る必要があるなら、私は自分の弱さを誇ります。」（Ⅱコリント 11:30）

パウロは、自分が弱いことがわかった時に神の恵みが見えてくることを知り、弱さが宝であることを知りました。

つまり、神が私達に与えたい慰めとは、自分が拒否してきた自分自身を受け入れられるようにしてくださることなのです。神の慰めを受けた者は、自分の弱さが受け入れられるようになります。そして、自分の弱さを受け入れると、人の弱さを受け入れられるようになり、人をさばかなくなります。

パウロは、名家に生まれた非の打ち所のないエリートでした。だからこそ、イエス様を迫

害したと言えるでしょう。しかし、彼は、イエス・キリストに出会い、様々な苦しみに会うことで自分の弱さに出会い、そこに主の慰めがあることに気づき、思いが変えられました。こうして、苦しみの先にある慰めに目を留めることができるようになり、苦しみの意味を理解したのです。

2. どんなことがあっても倒されない

「私たちは、四方八方から苦しめられますが、窮することはありません。途方にくれていますが、行きづまることはありません。迫害されていますが、見捨てられることはありません。倒されますが、滅びません。」(Ⅱコリント 4:8-9)

パウロは、この御言葉を何度も経験しました。もうダメかと思った時、何度も助けられた経験によって、パウロは、神は必ず助けくださるから、絶対に倒されないことに気づいたのです。なぜなら、神はいつも私達の苦しみを背負い、一緒にいてくださるからです。ここに大きな神の慰めがあると、パウロは気づいたのです。

多くの人、苦しみに会うと、自分のせいだと思って責めてしまうものです。しかし、苦しみは自分のせいではありません。むしろ、その先に素晴らしい慰めが約束されています。苦しみを通して私達は神の愛を知り、神が助けくださるから倒されることはないという慰めを受けるのです。

3. キリストと共に生きられるようになる

私達は、神を放って自分だけで生きていることが多々あるものです。しかし、苦しみを通して、キリストと共にしか生きられないということが見えてくるようになります。これが神の慰めです。

「また、キリストがすべての人のために死なれたのは、生きている人々が、もはや自分のためにではなく、自分のために死んでよみがえった方のために生きるためなのです。」
(Ⅱコリント 5:15)

「キリストのために生きる」という言葉は、少し誤解を生じます。この箇所を正確に訳すと、「すべての者のために彼が死んだのは、生きる者達が、もはや自分で生きるのではなく、その者達のために死んでよみがえられた方において生かされるためなのだ。」となります。

私達は、「キリストのために生きる」のではなく、「キリストにあって生かされている」者です。私達が神を支えるのではなく、神が私達を支えてくださっているのです。

神によって生かされていることにまったく気づいていなかった私達が、苦しみを通して、神に生かされていたのだと気づくなら、それが非常な慰めになるのです。キリストに生かされ、無条件で愛されている自分を知るようになったパウロは、この後、「これからはもう人間的な見方をしない」「すべてが新しくなっていたのだ」と告白しています。

聖書は、旧約時代から一貫して、このことを教えています。

「また、荒野では、あなたがたがこの所に来るまでの、全道中、人がその子を抱くように、あなたの神、主が、あなたを抱かれたのを見ているのだ。」（申命記 1:31）

かつてイスラエルは、モーセに率いられてエジプトを脱出しましたが、カナンの地に着くまでには40年もかかり、その間、様々な苦しみに会いました。この時、民は「なぜこんなに苦しめられるのか。エジプトにいたほうがましだ。」と言ってつぶやきました。しかし、神様は、「あなたが苦しんでいる間、私はあなたを抱きかかえ、あなたと共に苦しんでいるのだ」と言っておられます。それは、その先にある慰めを受け取らせたいからです。私達は、苦しみを通ることで、ようやくこのことに気づかされます。この慰めに気づくために、苦しみに出会うわけです。

神が苦しみを用意するわけではありません。しかし、この地上で生きている限り、死は訪れ、いつ私達は問題に出会うかわかりません。その苦しみに出会ったら、神も一緒に苦しみ、その先に慰めが用意されていることを思い出しましょう。

■慰めを受けるために

神の慰めを受け取ろうとする時、自分の中にある誤った考えや思い込みが、それを邪魔します。私達は、次のような思いと戦わなければなりません。

1. 苦しみは罪の罰ではない

苦しみに出会うとき、実に多くの人が、これは自ら犯した罪の罰だと考えます。そのため、苦しみは甘んじて受けるものだと思い込んでしまうのです。すると、その先に慰めがあることを受け取ろうとしなくなってしまいます。

苦しみは罪の罰ではありません。すべての苦しみは、この世界に死が入り込んだ結果、生じたものであって、個人の罪とは何の因果関係もありません。

ある時、弟子達は、ある盲人について、「この人の目が見えないのは誰が罪を犯したせいか」とイエス様に問いかけました。すると、イエス様は、この苦しみは神の栄光が現れるためだとお答えになったのです。苦しみがあるのは、悪いことをした罰ではなく、神の恵みがあふれるためです。

2. 脱出の道がある

「あなたがたの会った試練はみな人の知らないようなものではありません。神は真実な方ですから、あなたがたを耐えることのできないような試練に合わせるようなことはなさいません。むしろ、耐えることのできるように、試練とともに、脱出の道も備えてくださいます。」（I コリント 10:13）

苦しみには必ず脱出の道があります。神様は、苦しみを放置することではなく、必ず助けると何度も約束しておられます。苦しみに陥ると、脱出の道がないように思ってしまいがちですが、決してそのようなことはありません。

3. お前はダメな者ではない

私達は皆、自分はダメだという思いに支配されています。ダメなものだから、苦しみを受けて当然だと思っているのです。しかし、人が苦しみに会うのは、あなたが良きもので、神に愛されているからです。

パウロが出会った苦しみを考えて見ましょう。彼はダメな者だったから苦しめられたのではなく、良きものであり、神に愛されているがゆえに、キリストと共に苦しみを受け、それ以上の慰めを受けたのです。

「主はその愛する者を懲らしめ、受け入れるすべての子に、むちを加えられるからである。訓練と思って耐え忍びなさい。神はあなたがたを子として扱っておられるのです。父が懲らしめることをしない子がいるでしょうか。」（ヘブル 12:6-7）

神様にとって、私達は愛する子であり、良きものです。だからこそ、神様は私達を安息の地に連れて行きたいと願い、苦しみを受けることがあります。それは、苦しみの先に次のような平安が用意されているからです。

「すべての懲らしめは、そのときは喜ばしいものではなく、かえって悲しく思われるものですが、後になると、これによって訓練された人々に平安な義の実を結ばせます。」
（ヘブル 12:11）

苦しみは、私達に平安な義の実を結ばせます。

モーセは、40年間砂漠で苦しみ、ようやく神と共に生きる平安に気づきました。ダビデは王になるまで、実に多くの苦しみを経験し、命の危険にもさらされましたが、それでも神から目を離さず、神と共に生きることを知り、神に用いられていきました。私達の信仰の先輩たちは、ひとりの例外もなく、苦しみを通して神の慰めを受け、そして人を慰めることができる者になったのです。私達が目指すゴールはここにあります。

■慰めを与える者となる

「神は、どのような苦しみのときにも、私達を慰めてくださいます。こうして、私達も、自分自身が神から受ける慰めによって、どのような苦しみの中にいる人をも慰めることができるのです。」（Ⅱコリント 1:4）

私達が苦しみを受けるのは、苦しんでいる人を慰めることができるようになるためです。

これが隣人を愛するということなのです。イエス・キリストは、私たちと一緒に苦しみを受け、私達を慰めてくださいました。それを私達が本当に受け取ることができれば、苦しむ人たちと共に苦しみ、慰めることができるようになるのです。

これが、神が私達に望んでおられることであり、聖書が教える隣人への愛です。このゴールのために苦しみを通してしているのです。

「あなたがたは、キリストのために、キリストを信じる信仰だけでなく、キリストのための苦しみをも賜ったのです。」(ピリピ 1:29)

多くの苦しみを通ると、多く愛されていることを知ることができます。こうして、愛されていることを受けとって、苦しむ者と共に苦しみ、慰めることができる者になれば幸いです。これが、福音を伝える働きでもあるのです。